

### <第3回公開講演会要旨>

## 酒の社会学

梅 沢 精

ここで展開するのは、酒についての社会学である。はじめに、一般にはあまりなじみがないと思われる《社会学》について一言すれば、それは人間の《関係》についての学と定義できる。われわれは生きていく過程において、自分以外の他者とさまざまな関係を取りむすぶ。それは自覚するか否かにかかわらず、希望するか否かにかかわらず、あるいは密接か否かにかかわらず、まさに千差万別である。まず、生まれてすぐに無自覚のうちに母親と関わり、次第に家族関係を取りむすぶ。さらに家族のそとの人びとも関わりをもつようになる。地域社会で、学校で、職場で、あるいは遊びの時空において具体的な関係をつくりあげる。親和的、敵対的、あるいは支配的な関係など多様である。また、なかなか目にはみえない抽象的な関係もある。車を運転しているときに道路交通法などを介して関わる国家との権力関係、電車に乗ろうとして切符を買ったときに発生する電鉄会社との契約関係、ロック・コンサートに恍惚感をいだくか騒音しか聞きとらないかで異なる演奏者や作曲者との共感関係、あるいは街をなにげなく歩いているときの他者との他人としての関係などなど。これらは政治・経済・文化・社会の各領域における、気づくことの難しい関係である。社会学とは、こうした多彩な関係に通底する人間の関係の原理が何であるのか、そこにおいて人間はどのように自らの生を生きているのか、このような問いにこたえようとする学問であるといえよう。

以上のような社会学の観点から《酒》を考えると、おのずと焦点が定まってくる。しかし、そのまえに酒の歴史を瞥見しておこう。酒は一部の民族をのぞいて人類に共通の、しかも人類の歴史とともに古いものといわれている。起源は——酒ばかりでなく何についても起源の科学的確証はないが——おそらく

糖類（蜂蜜や果糖や乳糖等）の自然発酵によるものが最も原始的な酒ではなかったかと推測されている。その後、人間の管理のもとに意図的に醸造されるようになる。しかし、酒が他の食物とはことなつた意味をもつものとして人びとに受容されてきたことを見過ごしてはならないだろう。すなわち、酒のもつ酩酊効果が他の食物の日常性とは別の、人びとのもう一つの生活次元である《非日常性》を惹起するからである。前近代において非日常性を主催してきた宗教的事象と酒とが深い関係をもちつつ発達してきたことが首肯されるゆえンである。たとえば葡萄酒について見ると、ギリシア・ローマ神話においてはディオニュソス（バックス）が葡萄と葡萄酒づくりをヨーロッパにもたらしたとされている。かれは酒神として信女たち（バッカイ）をしたがえ、狂騒乱舞のうちに山野を放浪し、のちには靈魂の不死と死後の生命を説くオルフェウス教の大神となった。またキリスト教においては、ノアが方舟から出て作ったのが葡萄酒の最初とされているが、重要なのは葡萄酒がイエスの血として象徴化され聖別されていることである。イエスは、たとえば『マタイ福音書』では、十字架につくまえに葡萄酒の杯を弟子たちに与えて「みな、この杯から飲め。これは、罪のゆるしを得させるようにと、多くの人のために流すわたしの契約の血である」といっている。これが、後のキリスト教において最も重要な儀式となった《聖体拝領》の根拠となる。

日本酒においても同様である。日本酒は、米を麴によって糖に変えさらにアルコールに転換するという二段発酵の技術を要する点で、果糖から出発する単発酵の葡萄酒より高級な酒であるといえるが、ともかく日本酒も宗教と深い関わりをもっている。『日本書紀』の一書では、オオヤマヅミノカミが、その娘コノハナサクヤヒメとニニギノミコトとのあいだに生まれた子供を祝して醸したあめのたむざけ《天舐酒》が穀物酒の初めとされ、とくに前二柱の神はオオクニヌシノミコトやスクナヒコナノミコトとともに酒神として祀られている。歴史時代においては、朝廷はみきのつかさ《造酒司》をおいて10種にもものぼる酒をつくらせていた。とりわけ、宮廷儀礼の中核をしめる新嘗祭や大嘗祭でもちいられる《白酒》《黒酒》の醸造は大きな意味をもっていよう。鎌倉時代になると《朝廷の酒》にくわえるに

《僧坊の酒》が出現する。これは、キリスト教における《修道院の酒》に比肩しうるものであるといえる。酒は教義のちがいをこえて宗教一般に結びついているのである。

宗教の重要な社会的機能のひとつを簡潔に言えば、それは日常生活空間の《外部》にある圧倒的な《力》をなんとかコントロールして《内部》にもたらし、それによって内部を活性化しようとする人間の営みである。この非日常的な事態と酒の酩酊がもたらす非日常的な精神状態とが同期することで、酒の宗教性が醸成されるのである。しかし、酒は宗教儀礼の厳粛性のみに左袒するわけではない。儀礼の緊張のあとにくる弛緩した楽しみ、あるいはさらに無礼講や乱痴気騒ぎを演出するすぐれた媒介ともなる。柳田国男の指摘するように、民衆にとっては、こうした酒こそが身近なものであった。神々にそなえた酒をおろして共同体の成員が一緒に飲む。かつて、酒は集まって飲むものと決まっていた。なみなみと注がれた大盃を一座に廻してしたたか酔うまで飲むのがつねであり、作法でもあった（柳田国男『木綿以前の事』）。こうして人びとは神々と一体化し、同時に自分たちも一体化する。そうしたなかで、神々と共同体の、そして個々人のエネルギーが充填され活性化する。周期的におこなわれる儀礼を介してのこうした集合的な沸騰状態が社会を定期的に蘇生させるのである。このことは、合理的な社会になっても基本的には変わらない。合理主義そのものが、非合理的な集合的沸騰によって人びとの心に刻印されることではじめて、一つの信念として維持されるからである。社会は、つまり人間の関係は《非合理性》によってこそ維持されるものであるといえよう。酒の社会的な効用はなお大きいといわねばならない。